

会 議 要 旨

会議の名称	令和5年度第1回川越市立図書館協議会
開催日時	令和5年 7月12日(水) 午後 3時 開会 午後 4時15分 閉会
開催場所	中央図書館 3階 展示室
会長 氏名	会長 遠藤 克弥
出席者(委員)氏名 (人数)	副会長 盛田 隆二 委員 大澤 崇 須澤 美和子 吉岡 一美 内藤 俊史 檜村 雅章 廣川 康之 竹岡 優子 佐藤 由来 佐藤 葉子 (10名)
欠席者(委員)氏名(人数)	林 志信 飯田 敦 武藤 寛史 若林 英雄 (4名)
事務局職員 職 氏 名	中央図書館：富田館長 島崎副館長 原田副主幹 増田副主幹 間瀬主査 西図書館：駒井館長 川越駅東口図書館：谷沢館長 高階図書館：今井館長
会議次第	1 開 会 2 新委員委嘱書交付 3 会長あいさつ 4 中央図書館長あいさつ 5 職員紹介 6 議題・報告 (1) 令和4年度事業報告について (2) 令和5年度事業計画について (3) その他 7 閉 会
配布資料	次第 資料1 令和4年度 川越市立図書館 主要事業報告 資料2 令和4年度 事業報告書 資料3 令和5年度 予算の状況 資料4 令和5年度 川越市立図書館事業計画 川越市立図書館運営方針 第四次川越市子ども読書活動回診計画 入間地区社会教育協議会発行の広報誌さわらび第55号 令和5年度第2回川越市立図書館協議会における議題の募集 について (お願い)

議 事 の 経 過

【会議の概略】

- 1 開 会
- 2 新委員委嘱書交付
- 3 会長あいさつ 遠藤会長あいさつ
- 4 中央図書館長あいさつ 富田館長あいさつ
- 5 職員紹介
- 6 議題・報告 ※傍聴人なし
- 7 閉 会 盛田副会長よりあいさつ

6 議題・報告

(1) 令和4年度事業報告について

資料1に基づき各館長が説明を行った。

〈質疑応答〉

委員：東口図書館の20周年記念事業だが、すごく楽しそうだ。謎解きイベントの名探偵は君だ！は、楽しそうだと感心した。課題で気になったのだが、高等学校との連携事業は、川越市内の高等学校に限定しているが、川越市外の学校も参加の要望があり、検討する必要があると。市制施行90周年を記念して、10年間、高校生小説大賞というのを実施して、自分が選考委員をやっていたが、川越市在留の高校生と川越市の高校に通学している高校生が対象になっていた。近隣の高校の校長先生に呼びかけて、非常に活発に実施できた。対象は在住と在学にとした方が良いと思うが、予算的にも位置づけとしても、難しいと思うが、今後どのようにしたいと思っているのか。

事務局：当該事業は昨年初めて実施したもので、展示スペースが6校分程度のスペースしか用意できないため、応募が多数の場合は、抽選にしようと思っていた。書架二列分を一つの学校に割振り、個人ではなく学校ごとの申込みを受け付けた。6校の応募があった。入間地区の公立高校の学校司書の集まりを代表している司書にこの事業の説明をお願いした。昨年度の集まりで市外の学校からぜひ参加したいと要望があった。今年度も同じ事業を行う予定で、代表している学校司書に話したところ、市外の学校も参加できるよう検討して欲しいと言われた。展示スペースが可能な限り、受け付けたいと思うが、県内の高校全部に募集をかけるとなると、二の足を踏んでしまう。もう少し市内で定着してから、今後、広げていきたいと考えている。

委員：特に川越市外に対して図書館の活動が領域外ということではなく、スペースの問題ということか。校長会であると、入間地区とか、もう少し広域でやっているのでは募集を広げるには良いが、広く募集すると選ばれない高校も多くなることもありえるので、募集をかける時は、一定の枠を設けて、その中で抽選なりした方がよいのではないかと思う。

議 事 の 経 過

事務局： 検討していく。

会長： 高校の場合は非常に難しい。選別しなくてはならない。市の予算というのをベースとして、どこで線引きをするというのが、一つの思案のしどころである。川越市内にある高等学校、これは一つのアイデアだと思う。ただ、市立高校などは、市外から来ている高校生が多い。追及してしまうと限りなく広がっていくので、校長会で説明するのであれば、その辺を十分理解して、川越にある学校というのが、一つの区切りだと思うが、今後、協議会の意見を聞いて、良い方法を採用していけば良いと思う。

委員： 社会教育委員として出ているが、特に高階図書館で大人のためのおはなし会というのを大変関心を持った。図書館の利用者の統計が資料にあったが、お年寄り70歳以上の方の利用は、他の世代の人より多いというのがわかった。図書館というのは、自分も含めて、高齢の方には、利用の幅があると思う。中でも大人のためのおはなし会であるが、ぜいたくな話をする、30名が定員ということであるが、もっと増やせないか。コロナでオンラインというのは、難しいだろうが、もっと増やせるように考えてもらえるといい。

事務局： 大人のためのおはなし会は、興味を持ってもらっている話題で、ありがたい。高齢の方の事業は少なめであり、このような中で職員が頑張っている、自分もできるだけ良い方向にしたいと思っている。ただ、職員にとって大人に対してのおはなし会は難しい部分があり、ボランティアに頼っている部分がある。ボランティアの方を集めるのに苦労をしている。人数に関しては、語りにマイクを使わずにできるのが、30人程度である。高階市民センターには軽体育室などもあるが、軽体育室だと大きくなってしまい、声が届かないと思う。ただ、希望者の方も増えつつあり、コロナのあとで注目度も高まっていると思うので、いろいろと御意見をもらい、工夫ができればと思う。

会長： 人的資源を開発していき、できれば参加者が多くなるような状況を作って欲しいと思う。

委員： 電子書籍サービスの充実であるが、課題に利用者のニーズに合わせた電子書籍コンテンツの購入を図るとあるが、どのように要望につなげていくつもりか聞きたい。

事務局： 電子書籍サービスの選書については、人気があるものから選ぶというのがひとつあるが、基本は分野別の中からそれぞれ判断している。去年の人気があったものの状況とすると文学分野のものが多かった。貸出が多かったのは、「整理整頓が人生を変える」で、86回の貸出があった。選書にあたっては様々メディアを参考に総合的に判断して実施している。

会長： 良い事業が多いのだが、これからどうやって進めていくかが大事だ。ところでコロナ禍の後で、学級訪問や学級招待の事業が全館で2校というのは、あまりにも少ないのではないかな。もう少し計画的に進めて欲しい。

議 事 の 経 過

事務局：確かに実施状況の中に小学校2校とあるが、2校とは学校から図書館にきてもらう学級招待であって、図書館から学校に行く学級訪問は市内32校全て実施している。市内の学校は全て網羅している。

会長：川越は学校数が多いし、クラスだともっと多くなるので、人的資源も限られているので、今後、学校と連携して効果的な内容でやって欲しい。

(2) 令和5年度事業計画について

中央図書館長が令和5年度の予算の状況について、資料3に基づき説明した。資料4に基づき各館長が事業計画の説明を行った。

〈質疑応答〉

委員：新河岸駅周辺に日本語学校が何箇所かできて、外国人を多く見かけるようになったが、多言語の読み聞かせをしているとのことだが、外国人向けの図書館的なアプローチはあるのか。

事務局：事業としての計画はしてないが、昨年度の一般展示の中で、英語の本と英語を翻訳した本を並べた展示をし、好評であった。翻訳前の原本がわかるというものだ。今回、その言語を使った外国人が見たかは確認していないが、展示などで工夫してアプローチができればと思っている。高階市民センターには公民館もあり公民館で言語教室を開催しているとのことで、それぞれの得意分野を活かした活動ができればと考えている。

会長：今、日本は、ネパール人やベトナム人が増加しており、今後も労働力不足なので、外国人に労働力を頼る立場にある。今後、図書館も外国人向けの対応をしていかなければならない。ベトナムの人ためにベトナム語の本を提供していくか、日本語を学び易い、日本語を学ぶための本を揃えていけば良いか、検討していく必要があると思う。外国人労働者が増えてくるに当たって学校など外国人の子供が増えている中で図書館がどのような役割を担っていくのかというのが、今の意見にあると思う。協議会での検討事項になる。

委員：事業計画をみて、色々な事業を予定していることにわくわく感がある。先程の話もあったが、高階図書館は公民館と複合施設である。また、西図書館は小学校と複合施設である。自分は、霞ヶ関北小学校で国語の教員の教育実習を行っており、子供たちと一緒に図書館に行った経験がある。徒歩で行ける場所にこのような施設があるというのは、環境的に恵まれていると実感した。複合施設のメリットを工夫して考えていると思った。ひとつ質問だが、中央図書館の一般向け事業にある郷土資料解題講座は、どのくらいの年代の人を対象としているのか。事業報告にあった年齢別の利用者数を見ると、幼児や中高生の利用者数が本当に少ないと実感がある。この講座は大人向けのイメージがあるが、子供向けや中高生向きにというのがないと良いと思った。

事務局：郷土資料解題講座の対象年齢であるが、中学生を除く15歳以上の

議 事 の 経 過

方に限定しており、古文書を読み解く形なので、大人向けのものである。
委員： 今までの話は、図書館に来てもらうという話が多かった。川越市で巡回サービスがなくなったのは、いつごろか。近隣の市では、やっているところがある。自動車で巡回するというのは、集客にとっては、非常に大きな力があるのではないか。なくなったのは、経済的な観点からコストがかかり過ぎるという発想でなくなったのではないかと思うが、それを復活させようという提案とか、要望はないのか。

事務局： 移動図書館やまぶき号という名前で、マイクロバスのような車両を使って市内を巡回していたが、平成19年に廃止している。当時使っていた車両が排出ガス規制で買い替えなくてはならないというのがひとつあったが、当時の話であると利用者が少なくなっていたという状況だったと聞いている。当時の判断とすると廃止するという事になった。それと同時期に、分館を建設したということもある。今のところ、移動図書館を復活して欲しいという要望がない状況で、復活させようという検討もしていない状況である。

会長： 今、委員が理由のひとつとしてあげた経済的な状況、財政的な問題である。図書館の予算はどんどん減ってきている状況にある。その中で車を買替えるには、場所を借りなければいけないことや人的な問題、経済的な問題があがって、当時やめたのではないかと思う。市民から移動図書館の復活の要望があがってきたなら、協議会でも検討が必要であるし、協議会の声としてあげていく必要があると思う。これからの高齢社会の中では、ますます必要になってくるのではないかと思う。今後、高齢者も高学歴の人が多くなってくる。文字離れではなく、本を広げたいと思う文字に寄り添ってきた人たちに本が必要となってくる。このような状況を考えると、ぜひとも課題から外さないようにして欲しい。

委員： 児童向けの事業で、自分も子供であったら行ってみたいと思うような事業がたくさん並んでいる。コロナ禍があけてきて、事業に参加する子供たちが多く来ると良いと思う。また、事業に参加した子供たちが図書館を知ってもらい、最近の本がないという家が増えてきていると思うので、本が並んでいるところを見るだけでも、違った日常や体験ができるのではないかと思う。児童向け事業を行うにあたって、職員が児童や若年者と接するのに苦労や気を使うこと、逆に児童から何か求められることがあることが想像される。児童と接することについての職員研修や職員への支援は、市の図書館としてやっているか。職員が困ったときの対応や運営のしかた、児童、生徒に接する時の注意点、良い接し方の研修をやっているか、あるいは考えているのか。

事務局： 児童に関する行事にかかわる職員は、県が行っている児童図書館養成講座に参加することになっている。入門も含め色々とレクチャーがされるもので、例えば子供の前で知らないふりをしてはいけないなど、子供と

議 事 の 経 過

の関係を損ねない対処法を習得する。学級訪問や学級招待は、授業の1時間分を割り当ててもらって行うものなので、気構えを持ってプログラムを組み、新人の司書にはしっかり指導した上で、学級訪問や学級招待を行うようにしている。

委員：子供たちにとって、とても良いイベントがたくさん並んでいると思うので、成功することを祈る。

会長：学校では色々な問題を抱えた子供たちが増えているので、学校と十分に話し合っていて欲しい。先生たちも色々問題かかえて大変である。埼玉県で教育委員をしていたが、問題の多さに驚いている。図書館ができることはやっていき、皆で協力してやって欲しいと思う。

委員：今の話で、子供とかかわるといのは、すごく大事な事だと思った。幼稚園や保育園とコラボレーションして、事業をするのも一つの考え方と思う。自分の子供が通っているのは私立幼稚園だが、絵本館というのが、最近出来た。子供と親が絵本を一緒に読んで、絵本とじっくり向き合う時間を作れるという場所だ。また、幼稚園では先生たちが、絵本チャンネルという絵本を紹介してくれる動画を親に送ってくれる。このような親向けのものとか、実に色々なことをやっているの、このようなものとコラボレーションしてみても、どうかと思う。それから、事業報告書に、周知が必要という記述が何か所かあった。市民にこれだけ充実した事業を実施しているということをわかってもらうには、ホームページを開いた人しかわからない情報ではなく、それ以外の人たちにも目につくようなところがあると良いと思う。例えば、返却ポストは公共施設に設置されているが、スーパーやコンビニなど市民が必ず行くような場所に返却ポストがあり、返却ポスト自体が結構な存在感なので、返却ポストに催しもの情報が貼ってあれば、日ごろは図書館に行かない人でも知ることができるのではないかと。また、回覧板の中に図書館だよりみたいなものが入っているのを見たことがない。回覧板にあると、図書館でやっていることがわかると思う。現実ばなれをしているかもしれないが、一つの考えとして提示した。

事務局：いかに図書館をアピールしていくかということは図書館の課題であると思う。返却ポストだが、毎年広げられるか検討をしているが、引受け手がないというのが、現状である。そのようなことも含めてもう少し図書館が外に出て活動を行う必要がある、また、便利に使えるよう考える必要があると思っている。課題として考えていきたいと思う。

委員：社会教育委員会では、子供の居場所というのが、良く話題になる。図書館には、図書館の本を読まなくても自分で持ってきた本で勉強しても良い勉強の部屋があって、中学生、高校生が集まって勉強したり、勉強が終わったらちょっと話したり、一種の居場所みたいなところではないか。これからもこのような役割になるのではないかと。しかし、本を借りなければ、図書館の事業に入らない。これをどのように考えたらよい

議 事 の 経 過

のかと前から疑問に思っていた。図書館職員はどのように考えているか。
事務局：高階図書館は中央について勉強スペースが広い。年齢を問わず、色々な方が勉強スペースとして使っていて、コロナ禍が終わり席の間隔を戻しスペースとしては狭くなっているが、65名の席を確保している。放課後になると中高生が仲間と誘い合わせてきているのは見かけている。確かに本は借りていかないし、おしゃべりをしていて注意することもある。これは図書館としての回答ではなく私見だが、今、子供たちは、何かをしなければならぬことが非常に多くなっている。そのなかで図書館というところは、「何をしても、しなくても、良いところ」かと思っている。迷惑をかけないようにしてもらえば「何をしても良いところ」という施設でありたいと、少なくとも高階図書館はそのように考えて運営している。

委員：自分も行きたくなった。

会長：今、社会的に両親と子供をどのように見守っていけるのか、社会の外の枠でどのように見守っていけるのかというのが大切なところだ。回答の中で何をしても良いとあったが、どんなかっこうで本を読んでも良いという場所であると良いと思う。北欧の非常にレベルが高く、学力の高いスウェーデンの学校の読書時間を見ると、ゴムのボールがたくさん置いてある中で本を読んでいる。本を読む楽しさを味わうことが大切だということで、学校は取り入れてるということだ。きちんとスペースを与えて読まない駄目だということもなく、好きな恰好をして、寝たりしながらでも良いというのが、本に対する愛着をだんだん持てるようになるという発想らしい。日本でこのようにしている所があるかわからないが、回答にあったように、息抜きをして、そこに本があって、初めは絵本で、文字が読めるようになるとだんだん面白くなり、良い本を読んでいく。そのような場所であっても良いと思う。今度、川越市はコミュニティ・スクール構想を実践するそうだが、コミュニティ・スクールは、大人が作ったプログラムの中で動かなければならない。そのような点から考えると図書館の回答した部分を維持して欲しい。

(3) その他

昨年度に付議した川越市立図書館運営方針と第四次川越市子ども読書活動推進計画の最終版を配布。「令和5年度第2回川越市立図書館協議会における議題の募集について(お願い)」を事務局が説明した。

〈質疑応答〉なし